

コラム集

『出雲国風土記』と松江の歴史ー コラム3

『出雲国風土記』に  
登場する豪族  
出雲臣と社部臣

〈いづものおみ〉

〈こそべのおみ〉

【表紙写真】 青木遺跡へら書き須恵器「社邊(こそべ)」 部分

1

本コラムは、松江市が2026年3月に公開した、「『出雲国風土記』と松江の歴史」を構成するコラム集の第3編です。

---

2

このコラムは、事務局（松江市文化スポーツ部）と松江市文化財保存活用地域計画協議会の監督・指導のもと、丹羽野裕（松江市文化財総合コーディネーター）が執筆しました。

---

3

文章内に引用している、『出雲国風土記』の読下し文は、『松江市史 史料編3 古代・中世Ⅰ』からの引用です。

---

4

「『出雲国風土記』と松江の歴史」は次頁の9編を公開しています。本編と一緒に、是非ご覧ください。

〈 公開中 〉

## A 本文編 (全5章)

<https://sitereports.nabunken.go.jp/147298>

## B 詳細解説編

### 1 『出雲国風土記』と松江の山と野 詳説

<https://sitereports.nabunken.go.jp/147302>

## C エッセイ集

### 1 『出雲国風土記』の郷の伝承 〈松江市編〉 [森田 喜久男]

<https://sitereports.nabunken.go.jp/147303>

### 2 『出雲国風土記』の山 登頂記 —「風土記の山」の風景と魅力— [三代 隆司]

<https://sitereports.nabunken.go.jp/147304>

### 3 『出雲国風土記』にみる古代人のレジャーと観光 〈松江市編〉 [森田 喜久男]

<https://sitereports.nabunken.go.jp/147305>

## D コラム集

### 1 地質学からみた『くにびき神話』 [野村 律夫]

<https://sitereports.nabunken.go.jp/147306>

### 2 『出雲国風土記』の布自枳美高山・女嵩山と嵩山・和久羅山

<https://sitereports.nabunken.go.jp/147307>

### 3 『出雲国風土記』に登場する豪族 出雲臣と社部臣

<https://sitereports.nabunken.go.jp/147308>

本編

## E 読下し編

(松江市部分 巻首・意宇部・島根郡・秋鹿部・巻末の一部)

<https://sitereports.nabunken.go.jp/147309>

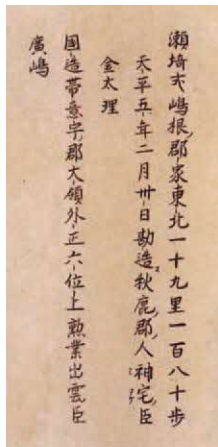
# 『出雲国風土記』に登場する豪族

## 出雲臣と社部臣

〈いづものおみ〉

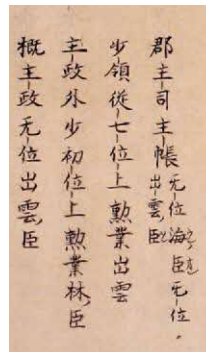
〈こそべのおみ〉

### はじめに



『出雲国風土記』巻末の編集責任者「出雲臣廣嶋」(古代文化センター本)

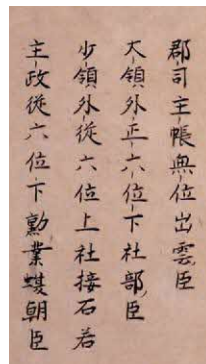
『出雲国風土記』（以下「風土記」と呼びます。）には、出雲国九郡の郡司（ぐんじ）の氏族名や編纂責任者の出雲国造（いづものくにのみやつこ）の氏名、各地で功績をのこした豪族名などが記されています（ヒストリー本文編（※下リンクよりの第4章に詳細を記しています。）。そのなかでも出雲国造で意宇（おう）郡の郡司を兼任する出雲臣と、島根郡の郡司長官である大領（だいろう）を務めていた社部臣は、松江を代表する豪族（氏族）集団です。大きくみれば、出雲臣は松江市南部を本拠と



意宇郡の郡司  
(古代文化センター本)

し、社部臣は松江市北部を本拠としていました。

松江は中海、大橋川、宍道湖（風土記の入海）をはさんで、南北に分断されています。それでいて、松江市は南北を一体化して町が形成されています。南北の深い関係は古代以前にさかのぼることが分かっており、風土記に記された二つの豪族集団の関係は、とても気になります。時代を古墳時代にさかのぼることも含めて、社部臣と出雲臣の関係を探ってみたいと思います。



島根郡の郡司  
(古代文化センター本)

● 本文編 『出雲国風土記』と松江の歴史  
<https://sitereports.nabunken.go.jp/147298>

# 目次

<b>1. 出雲臣、社部臣の本拠地と地勢</b>	
(1) 出雲臣の本拠 .....	001
(2) 社部臣の本拠 .....	001
(3) 出雲臣と社部臣が手を結ぶ .....	003
<b>2. 畿内の豪族と社部臣・出雲臣</b>	
(1) 文献古代史から見た	
社部・出雲と摂津三島地域 .....	006
(2) 考古学から見た	
社部・出雲と摂津三島地域 .....	008
(3) 国内をまとめ、近畿地方と通じた	
出雲臣と社部臣 .....	010

1

## 出雲臣、社部臣の 本拠地と地勢

### (1)出雲臣の本拠

出雲臣（いずものおみ）は意宇（おう）郡の郡司で、風土記に書かれた郡司5名のうち、長官の大領はじめとして3人が官職についています。意宇郡は、風土記の時代には安来市から松江市宍道町に至る広い範囲を占めていました。

**松江市街地南郊が本拠** その中で、出雲臣の本拠地は、現在の松江市街南郊の大庭町、山代町、大草町、竹矢町あたりだったものと考えられています。意宇川の下流にできた「意宇平野」とそのまわりにある台地や山地を含めた範囲とっていいでしょう。

この地域には意宇平野の中央南側に、7世紀終わりころに出雲国府（国の政治・行政を執行する様々な機関が集まるところ）が成立し、その近辺に意宇郡家（おうぐんけ、郡の役所）、意宇軍団などの国や郡の中心施設が設けられました。『出雲国風土記』に記された寺院である「新造院」も2か所で創建されました。うち山代郷の南新造院（山代町四王寺（しわじ）跡）は、出雲臣弟山（いずものおみおとやま）が建立したと風土記に記載されており、出雲臣がこの地域に基盤を持っていたことが分かります。

**出雲臣本拠の地理的特徴** この地域の特徴として重要なのは、松江の中でもっとも流域面積の広い意宇川が作る平野があることに加え、北側が現在の大橋川・中海南西岸に面していることです。そもそも、中海南岸は出雲国では意宇郡の範囲ですが、その水域が西端の竹矢町付近でグッと狭まります。その北岸が島根郡になるわけです。

### (2)社部臣の本拠

社部臣（こそべのおみ）は島根郡の郡司で、風土記に書かれた郡司4名のうち、長官の大領（だいりょう）の官職についています。島根郡は、風土記の時代には現在の松江市の東北部分にあたり、西の秋鹿郡との堺は、現在の佐陀川の流路あたりと考えて大過ありません。

**本拠はどこか** 社部臣の本拠地は、意宇郡の出雲臣のように簡単には特定できません。まずは、風土記の時代の前の時代、古墳時代の松江北部の有力古墳は1か所に集中せず、おおまかに4つの地域に分かれます。現在の持田・川津地区、朝酌地区、古曾志周辺地区、鹿島町講武周辺です。これらの地域のうち、風土記時代に近い古墳時代後期（6世紀～7世紀）の首長古墳に限ると、持田地区と朝酌地区の2か所が集中地域になります。郡の中心的機関の島根郡家所在地は、持田地区と考えられるので、奈良時代の中心的地域は持田地区周辺と言えるかもしれません。

**元の本拠地は秋鹿郡か** ただ社部臣の本拠は、歴史的に移動している可能性も指摘されています。社部の「部」は6世紀以降の部民制と呼ばれる、大王家や中央豪族と地方の豪族とのつながりを表す呼称で、「こそ」という豪族一族の名に「部」が付属したものと考えられます。つまり「こそ」という氏がいたと推測されています。そのことから、現在の古曾志町（風土記の秋鹿郡）周辺が社部臣の古い段階の本拠だった、という説が有力なのです（ヒストリー本文編（※下リンクより）4章3節でも詳しく説明しています。）。風土記秋鹿郡の社（やしろ）条には「許曾志社（こそしのやしろ）」が記されていますので、古代にさかのぼる地名であることは間違いありません。そうであれば、社部臣は歴史的に相当広い範囲に影響力を及ぼす豪族集団だった可能性が高くなります。島根郡だけでなく、秋鹿郡も含めた松江市北部全体に力を及ぼした豪族だったと推測できます。

### ● 本文編 『出雲国風土記』と松江のヒストリー

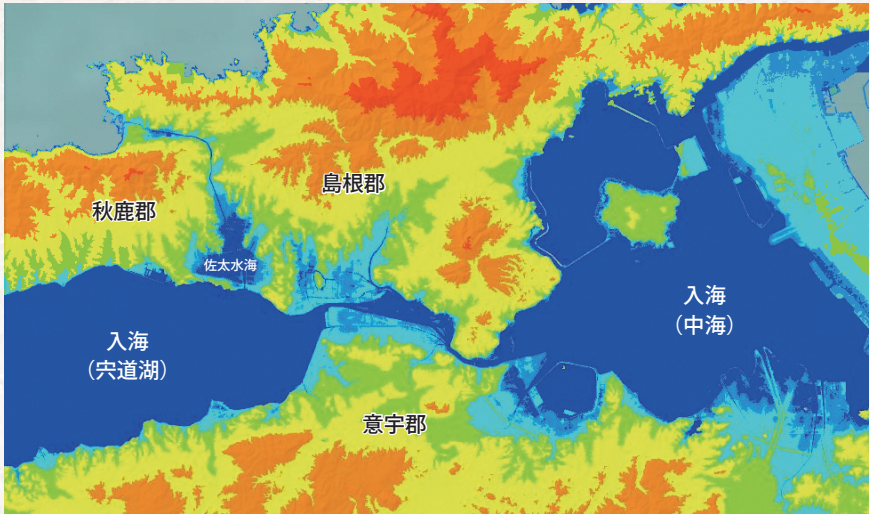
<https://sitereports.nabunken.go.jp/147298>



古曾志町の5世紀の大型古墳 左：丹花庵古墳、右：古曾志大谷1号墳

### (3)出雲臣と社部臣が手を結ぶ

意宇郡と島根郡は、風土記でいう「入海（いりうみ）」が郡堺となっており、入海は現在の中海・大橋川・宍道湖を一体として呼んだもので、大きな水域で隔てられています。あえて二つの湖と一つの川を一体にして呼ぶのは、これらが出雲国の東西を結ぶ水運の大幹線だったからとも考えられます。



入海と意宇郡、島根郡の位置関係（国土地理院地図）

**朝酌促戸（あさくみのせと）** 通常、水域はその両側の地域間の陸上交通の障害となります。一方で意宇郡と島根郡の間には、湖をつなぐ大橋川部分があり、とくにその東端には最短短約140mの幅しかない「朝酌促戸（あさくみのせと）」があります。この狭い水道部分は約1.4kmの長さがあり、しかも水域は相当に浅かったと考えられます。

この地形的特徴は、東西の水上交通のボトルネックとなり、促戸の部分は、陸と水の交通の十字路となりました。実際に『出雲国風土記』では、この朝酌促戸の記述はとても豊かです。

「朝酌促戸（あさくみのせと）。東に通道（かよいじ）あり、西には平原（はら）あり、中央（まなか）は渡（わたり）なり。則ち筥（ひび）を東西に亘す。春秋に入出る大き小さき雑（くさぐさ）の魚、臨時（とき）として筥の辺（ほとり）に来湊（あつまり）て、駱駝（はしりおどり）て、風のごとく押し、水のご

とく衝き、あるは笠を破壊（やぶ）り、あるは日鹿と製りて鳥に捕らる。大きき雑の魚、浜藻（はまも）家に鬮（み）ち、市人（いちびと）四（よも）より集ひ、自然にいちくらを成せり。」

官道の渡（わたり、船の渡し場）があって、多くの魚が集まり、それをねらう鳥も来ます。人が集まり、市ができている様子も描かれます。この狭い水道は、東西を行き交う舟を留めて、通交管理ができる重要な拠点でした。一方で、この場所を管理監督するためには、南の意宇郡側と北の島根郡側とが手を結ぶ必要があります。そのためには、それぞれの地域の最有力者、豪族のトップ同士が誼（よしみ）を結ぶことが不可欠でしょう。つまり、出雲臣と社部臣が強い関係を築いていたはずなのです。



西上空から見た「朝酌促戸」（島根県埋蔵文化財調査センター提供）

**出雲国の中心** 松江が出雲国の中心になったのは、この東西水上交通のコントロールができたことが、とても大きかったと思われます。江戸時代に出雲国の国主が松江に城を構えたのも同じ理由です。そうした状況が少なくとも奈良時代には生まれていました。

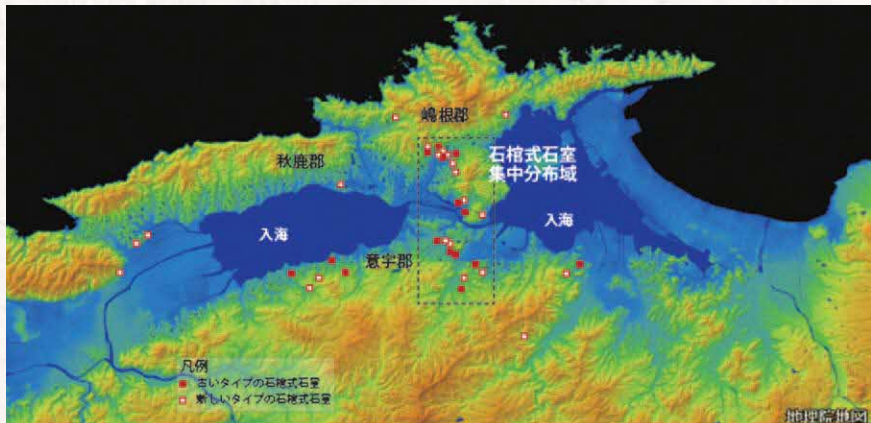
中心地としての大橋川兩岸の立ち位置は、考古学的にはさらにさかのぼります。少なくとも古墳時代中期の5世紀には、大橋川兩岸に出雲有数の大型古墳が

集まり、大王墓と同様の優れた埴輪（はにわ）が古墳を飾りました。詳細は「水がはぐくんだ松江の歴史」をご覧ください。ここでは一例として6世紀後半から7世紀前半の古墳の様相を紹介しましょう。

### ●水がはぐくんだ松江の文化の歴史

<https://sitereports.nabunken.go.jp/142100>

**石棺式石室があらわす出雲臣祖先・社部臣祖先の拠点** 6世紀の終わりころ、出雲東部地域では、地域の首長（有力豪族）は古墳を造るにあたって、葬られる場所として「石棺式石室（せっかんしきせきしつ）」という出雲独特の横穴式石室を用いました。次の図は、その分布を表したのですが、松江市街の南部と北東部に集中していることが明らかです。この集中地域が、のちの意宇郡と島根郡の拠点であり、重要地域だったことは間違いないでしょう。そして、周辺地域よりも有力豪族が多くいて、松江南部地域と北部地域を取りまとめていた可能性が高いと考えられます。その中核にいたのが、のちの出雲臣（いずものおみ）と社部臣（こそべのおみ）と考えるとわかりやすいと思います。南と北から挟み込んで「朝酌渡」を掌握し、出雲東部の広い地域をまとめていたのだと考えられるのです。



6世紀終わりから7世紀ころの石棺式石室を備えた古墳分布図  
出雲臣の本拠と社部臣の本拠に集中しています

## 畿内の豪族と社部臣・出雲臣

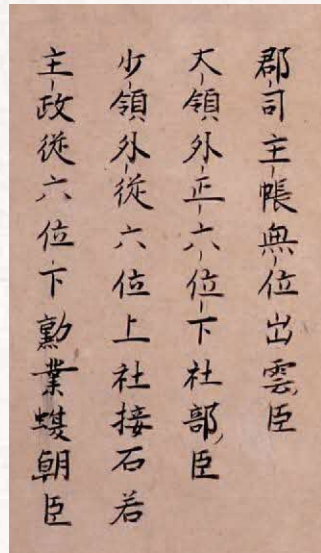
社部臣（こそべのおみ）と出雲臣（いずものおみ）との関係の深さは、都に近い近畿地方の地名や豪族名からもうかがうことができます。

**出雲の社部と摂津の社部** 社部氏は全国的にみて珍しい氏族です。現在わかっている限りでは、地方では出雲にしか見られません。一方で日本の都たる畿内（大和、河内、和泉、摂津、山城）地域には登場してきます。その本願地は、摂津（せつつ）国島上郡（しまのかみのこおり）野身郷（のみのさと）と考えられています。現在の大阪府高槻市古曾部（こそべ）町周辺にあたります。松江市古江地区の古曾志町との類似にピンとくる方も多いでしょう。古曾部は古代には許曾部、許祖部などとも書き、古曾志は「風土記」に記された許曾志社（こそしのやしろ、現在の古曾志神社につながる）に通じます。「こそ」という音と許曾という漢字でつながる両者は、島根郡郡司大領の社部（こそべ）臣と深い関係があることは想像に難くありません。

そのような名前からのインスピレーションだけでなく、この三島と呼ばれる地域（三島郡が島上郡と島下郡に分かれます）と出雲はとても深い関係が読み取れます。それは文献古代史と考古学、双方からうかがうことができます。

### (1)文献古代史から見た社部・出雲と摂津三島地域

古代の文献で社戸（こそべ）臣を名乗る人物が登場し、その拠点が三島地域、特に古曾部町周辺だったことは前にお話ししました。そのほかに、次のような点に関連をうかがわせる点としてあげることができます。



島根郡の郡司  
(古代文化センター本)

### ①古代野身郷（のみのさと）と野身神社の存在

古曾部町周辺は古代には野身郷だったと考えられます。「のみ」は『日本書紀』に登場する野見宿禰（のみのすくね）の「のみ」と考えられます。野見宿禰は相撲の元祖であったり、人物埴輪の提唱・創始者として重要な役割を果たします。そして彼は出雲から呼ばれて天皇家に深くかかわっています。

### ②野見宿禰（後裔は土師氏）と出雲臣は同族

野見宿禰を祖先とする土師（はじ）氏は神話上の先祖を「天穗日命（あめのほのみこと）」としています。これは出雲臣とおなじで、系譜の上では同族と



摂津三嶋地域（現大阪府高槻市）の社部氏・出雲関連遺跡分布図（国土地理院地図）

なっています。三段論法になりますが、野見宿禰は出雲臣の関係者ということになります。ちなみに「野見」は「能義」・「乃木」に通じる、という説もあります。

### ③淤宇宿禰（おうのすくね）とのリンク

『日本書紀』「仁徳即位前記」に、出雲臣の祖先として「淤宇宿禰」が登場します。「淤宇」は「意宇」のことですから、出雲氏は古墳時代には意宇氏と呼ばれていたことがわかります。年代をあてれば5世紀ころのことで、淤宇宿禰は天皇家の財産である「屯田（みた）」を管理する長官を務めていました。8世紀のことですが、摂津国には「竹村屯倉（みやけ）」があり、その所在地は茨木市桑原・耳原とされています（地図中に表示）。そして竹村屯倉にかかわって設置された田部が暮らしていたと考えられる地名が、古曾部町近くにあるのも偶然にはできすぎです。

## (2)考古学から見た社部・出雲と摂津三島地域

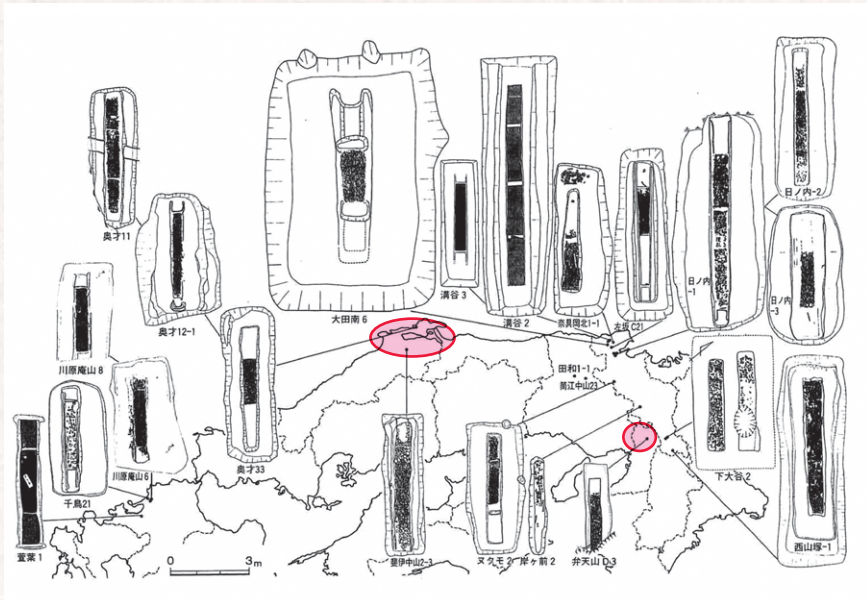
古代の文献で両地域の間には、社部（こそべ）臣と出雲臣のつながりが見えてきましたが、考古学でも出雲とのつながりを見つけることができます。

### ①島上郡衙（しまがみぐんが）跡から山陰系土器が出土している

山陰系土器とは、弥生時代後期後半から古墳時代前期に、一目見て島根県、鳥取県周辺で使われた土器の一群です。島上郡衙跡からは、そのなかでも特徴的なコシキ形土器をはじめ、各種の山陰系土器が出てきています。3～4世紀頃のことです。

### ②奥才（おくさい）型木棺を弁天山D2号墳が採用している

奥才型木棺とは、細長い木棺の以外を置く部分に小石を敷いたものです。松江市鹿島町奥才古墳群から命名されました。古墳時代前期～中期（4世紀～5世紀）に出雲地方、特に島根半島東部に多く見られる特徴的な棺のタイプです。北部九州から丹後にかけての日本海沿いにみられ、丹後から山城を経て1か所、三島地域に弁天山D2号墳に採用されています。出雲地方、特に東部の島根郡・秋鹿郡との関係性をうかがわせませす。

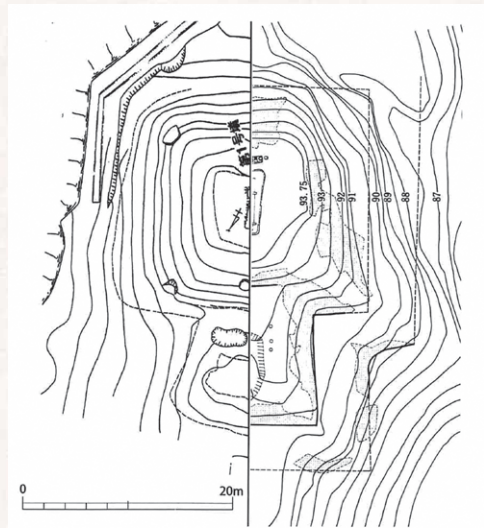


「奥才型木棺」とそれに類する木棺の分布

### ③弁天山D3号墳が前方後方墳である

前方後方墳は5世紀後半以降に出雲地方東部の首長墓で造られた墳形ですが、全国的にはそのほとんどが古墳時代前期（3世紀後半～4世紀後半）に造られました。古墳時代後期（6世紀）には、出雲東部の専売特許のようになる古墳の形です。

弁天山D3号墳は5世紀後半の前方後方墳で、出雲で前方後方墳の時代を迎える時期とほぼ同じです。松江のしかも島根郡の中心地に近い西川津町金崎（きんざき）1号墳と同じ時期



高槻市弁天山D3号墳（右）と松江市金崎1号墳（左）の墳丘の比較（池淵2017より転載）

で、かつその形も似ているのです。偶然の一致とは思えず、三島地域と出雲、とりわけ島根郡との強いつながりを思わせます。

#### ④郡家（ぐんげ）川西1号墳・2号墳が前方後方墳である

平野の中で発掘調査された郡家川西古墳群は6世紀以降の群集墳で、2つの前方後方墳が見つかっています。いずれも6世紀後半頃に造られたもので、22m程度と小型の墳丘です。この時期には全国的に見てもほとんど前方後方墳は造られておらず、出雲だけで前方後方墳が造られています。しかも25m前後の小型のものも複数見られる時期で、川西1号墳と2号墳は出雲と深いつながりの中で造られたと推測できます。

※松江の古墳と日本海沿岸を通じた交流については「水がはぐくんだ松江の文化の歴史」のⅡ章2節に詳しく書いてあります。

#### ●水がはぐくんだ松江の文化の歴史

<https://sitereports.nabunken.go.jp/142100>

### (3)国内をまとめ、近畿地方と通じた出雲臣と社部臣

長々とお話ししてきましたように、近畿地方、特に摂津国（せっつのくに）三島の地域と出雲国とはかかわりが深そうな状況が浮かび上がります。一つ一つの根拠は、直接証拠としては弱い点もありますが、これだけの関連が積み重なると、真実味が強くなってきます。それが特定の豪族集団、出雲臣と社部臣に連結できることが歴史的には大きな意味を持ちます。また『日本書紀』によれば、出雲臣の祖先としての「淤字宿禰（おうのすくね）」が5世紀の伝承として登場することも意味がある可能性が高いのです。

出雲国内では、入海北部と南部は少なくとも5世紀前半から同様の古墳文化が認められ、それは6世紀終わり頃にはより強くなります。島根郡朝酌郷（あさくみのさと）大井浜での須恵器集約生産も始まります。社部臣（こそべのおみ）の祖先が秋鹿郡恵曇陵（えとものつつみ）の排水工事を行った記録も風土記に残ります。出雲臣と社部臣の結びつきは国内で水運を掌握するために強化され、同時にヤマト王権とも誼（よしみ）を結んで、出雲国内の影響力を強くしていったものと考えられるのです。

[参考文献]

- 池淵俊一2017『古墳時代史にみる古代出雲成立の期限』松江市ふるさと文庫18
- 島根県古代文化センター編2015『前方後方墳と東西出雲の成立に関する研究 島根県古代文化センター研究論集 第14集』
- 島根県古代文化センター編2023『出雲国風土記一校訂・注釈編一』八木書店
- 高槻市教育委員会1982『鳴上郡衛跡他関連遺跡発掘調査概要11』
- 丹羽野裕・平石充2010「出雲・大井窯跡群の様相と生産体制試論」『古代窯業の基礎研究－須恵器窯の技術と系譜－』窯跡研究会
- 吉松大志2024『古代国家の形成と出雲国の誕生－大王権の確立と部民制の進展－』松江市ふるさと文庫34

#### ヒストリー作成体制

- 事務局：松江市文化スポーツ部松江城・史料調査課、文化財課
- 本文編集執筆：文化スポーツ部、丹羽野裕が松江市文化財保存活用計画協議会および事務局内で協議をして編集した。

---

---

## 松江のヒストリー集 5

### 『出雲国風土記』と松江のヒストリー【コラム集】

#### コラム3 『出雲国風土記』に登場する豪族 出雲臣と社部臣

令和8年(2026)3月30日

松江市文化スポーツ部 松江城・史料調査課



